

遊戯療法において「全体を捉える視点」を持つことの意義

— 選択性緘黙の事例と昔話の検討を通して —

高嶋 雄介

1. 問 題

(1) 遊戯療法における「内」と「外」

遊戯療法に向けられる問いの中で、最も素朴であるが、最も答えるのが難しいものは、「遊んでいるだけで、子どもの状態は良くなるのか」という問いであろう。それは、遊戯療法の「内」なる過程と日常生活におけるクライアントの様子といった遊戯療法の「外」での出来事が、どのように結びつくのかという問いである。そもそも“心的現実を扱う心理療法は、常に外的現実から解離したり、さらにはそれに脅かされたりする可能性”（河合,2001）をはらんでいる。しかし、言葉を中心とした心理療法においては、心理療法の「外」のことが心理療法の「内」において話されるため、「内」と「外」は繋がっているという錯覚が持たれやすいのに対して、遊戯療法においては、遊び、イメージといった非言語的関わりがその中心となり、言葉によって「外」のことが語られることが少ない。そのため、特にその「内」と「外」の繋がりが不明瞭であると感じられるのであろう。

遊戯療法における「内」と「外」の解離は、個別の事例の問題にとどまらない。それは、遊戯療法発展の歴史にも表れている。子どもに対する精神分析、つまり、遊戯療法に初めて本格的に取り組んだのは、Freud,A と Klein,Mであった。しかし、この二人が構築した理論や技法には大きな違いがあり、激しい論争が繰り返された。その争点の一つには、遊戯療法の「内」と「外」の問題が関係している。Freud,A は、子どもは現実の親から強い影響を受けるため、セラピストとの間で転移関係を築くことができない、また、子どもは超自我が存在しておらず、自由連想や夢を語れないために、精神分析は適応できないと考えた。それゆえ、Freud,A は、遊戯療法を行うにあたって、現実の両親との関係を良好に維持することを重視し、さらに教育的なアプローチや子どもが身を置く環境を改善することが必要であると考えた。Freud,A は“実際に保育園をつくったり、外側の環境をつくって”、“こどものところに直には触れない”（藤山,2010）道を選び、遊戯療法の「内」を放棄し、「外」を重視したのである。

それに対して Klein,M は、外的現実における対人関係とは異なる内的対象との関係があるとし、子どもとの間にも転移を形成することが可能だと考えた。そして、彼女は、子どもの遊びは大人の夢や自由連想と等価であると考え、言葉で語るができない子どもに対しては「今、ここ」で行われる遊びに表われる無意識の空想、転移を解釈することを徹底した。Klein,M は“精神分析本来の目的は子どもの心的世界に焦点を当て理解することであり、環境からのサポートに依拠すべきではない”と考えていたと言われる（木部,2008）。つまり、Freud,A とは反

対に、遊戯療法の「外」が放棄され、その「内」を徹底して重視したのである。この論争は、Klein,Mに軍配が上がったとされるが、次第に遊戯療法の「内」を維持するためには、「外」も十分に配慮されなければならないという両者の主張を折衷した考えが現実的であると考えられるようになった。この考えにおいては、遊戯療法の「外」は「内」を維持するという目的をもった副次的なものとして捉えられていると言えよう。

しかしながら、こうした「内」と「外」の両方を適度に重視するという姿勢は、次第に、遊戯療法の「内」と「外」の立場を逆転させたといっても過言ではない。例えば、昨今、クライアントの日常のニーズに合った具体的な援助の提供が必要という立場から、遊戯療法の「外」において、直接的で目に見える形の関わりが重視されることもある。また、虐待や発達障害などの対応が難しいケースが増えている現状においては、環境調整や連携など遊戯療法の「外」がその中心になることも珍しいことではない。あるいは、“多くの心理療法は内界にかかり、それを重視しているように振る舞いつつも、結局は外界の変化を期待し、それに注目している”(河合,1998)と言われるように、遊戯療法の「内」を中心に据えているように見えても、実際には遊戯療法の影響が、いかに日常生活での適応や好ましい変化や成長に繋がっているかが注視され、いわゆる「外」の規範が主役となって、遊戯療法の「内」がそれに追随することがしばしば起きている。今日、このような流れが最も究極に、そしてシンプルな形として結実しているのが、エビデンスに基づいた心理療法と言えるだろう。このような適応という「外」だけを重視するエビデンスベースト・アプローチは、今や“世界の潮流”(下山,2010)と言われる程であり、遊戯療法の「内」と「外」は完全に逆転しているのである。

このような現状において、まずなすべきこと、あるいは、唯一できることかもしれないこと、それは、心理療法において「内」と「外」との関係はどのように捉えられているのかを今一度検討し、心理療法の「内」や「外」とは何かを改めて問い直すことであろう。

(2) 心理療法を内と外に分けて捉える視点

心理療法の「内」と「外」との関係捉えるものの一つに、行動化という概念がある。行動化は、Freud,Sによって初めて提起された概念である。Freud,S(1914/2010)は、行動化について“被分析者は、たんに医者に対する個人的関係においてだけでなく、その他、治療の同時進行中のあらゆる生活上の活動や関係—たとえば、治療期間中に愛の対象を選択したり、何らかの課題を引き受けたり、あるいは何か事業を始めるなどといった場合—においても、想起への衝動の代わりとしてこの反復への強迫に身をまかすのである”。そして、“抵抗が大きければ大きいほど、想起は、それだけいっそう大掛かりに身を持って演ずること(反復すること)に取って代わられる”(傍点は筆者による)と述べる。それゆえに、治療が終結するまでは、現実生活において重要な決定を行ってはいけないという禁欲規則を重視し、心理療法の「内」において“患者が行為を通して放散したがつていることを想起の作業によって処理する”ことが目指されたのである。つまり、Freudは、心理療法の「内」においても、「外」においても、同じクライアントのテーマが反復して表れていると考え、治療関係を通して、そのテーマを明確に想起させ、そして直接的に操作するために、心理療法の「外」と「内」を区別し、その上で、「外」を制限し、「内」を重視したのである。“心理場面と物理的場面を分けて考えるのは考えやすく

するための一時の方便”（神田橋,1984）だったと言えよう。本論では、このような発想を、心理療法を「内と外に分けて捉える視点」と呼ぶことにする。

さて、その後、研究が重ねられ、行動化には“分析治療の経過にさけることのできないものとしておこり、コミュニケーションの側面、あるいは適応的側面のあること”（西園, 1979）が次第に明らかにされてきた。そして、福本（2008）によれば、現在、行動化は心理療法そのものを破壊しかねないものであり、クライアントが行動化に至るまでの“治療者側の寄与を見落とす”可能性も高いので、基本的には避けられるべきではあるが、“一見脈絡がなくて唐突な患者の行動を精神内界へとつなげる、優れて精神分析的な臨床概念”で、“常識的には不可解な行動を、むしろ患者の隠れていた無意識の一面を理解するために役立つ方法”であるとも考えられていると言う。そのため、避けがたく起こる行動化に対しては、セラピストが“設定と介入の方法を工夫して対応していくことが求められる”のである。このように、行動化とは基本的に心理療法の「内」が「外」に溢れ出た結果であり、それゆえ、溢れ出た「外」は治療関係に還元し、再び心理療法の「内」に戻し活用すべきものであると考えられているのである。さらに行動化については、“転移のものか転移と関係なしかの区別”（西園,1979）が厳密になされるべきで、心理療法の流れとは関係なく起こる出来事、もともとクライアントが衝動的なパーソナリティである場合など、治療関係と関わりがない「外」の出来事は、行動化と見なすべきではないという考えもある。つまり、単なる「外」とみなされた出来事は、心理療法の「内」に結びつけ、活用すべきものと考えられないのである。

(3) 心理療法の全体を捉える視点

これに対して、前川（2010）は、単なる心理療法の「外」であると思われるような出来事－例えば、セラピストの妊娠、クライアントが事故に巻き込まれるなど－で、“無意識的な意図を想定しない単なる偶然”であっても、クライアントとセラピストの両者をも含む全体として“心理療法の力がどのように働いてその事態を引き起こしているか”を見る視点を持つことが、治療的な意味を持つことを示唆している。このような考えは、コンステレーションを読む－“内的な状態と、それを取り巻く外的な状態”が“まとまりのあるイメージを形成している”という視点から、心理療法全体の流れを捉えること（河合,1991）－、あるいは、“客観的過程と対応した、ある心的内容の偶然の一致”（Jung,1955/1976）である共時性を治療的に活かすという発想に基づくものである。

コンステレーションや共時性と言うと、非因果性や偶然性に焦点が当てられることが多いが、こういった発想が生まれる根本には、心理療法とは関係ないように思われる「外」の出来事であっても、それを通して世界と“主体的な関わり”を持ち、“個人にとっての「意味」”（河合,1986）を見いだそうとする姿勢、“患者におこるさまざまな出来事は、現実面ではなんら繋がりが無いように見えても、内面の目、あるいは全体の目で見れば治療という中心に向かって一つの流れが起きている”（角野,1998）という物事の見方が関係している。

Giegerich（2006）は、“心理学のコミットは、目の前にあるこの問題、この症状、この状況、この夢、イメージ、テキスト、現象、各々のものに対してなされるものである”。そして、コミットした一つの素材をレトルトの中に入れ、レトルトの周りにあるもの一切排除し、このレトル

トの中にあるものだけに専心することによって、“この一つの、一見、取るに足りないように思われる素材が、いま私のために存在するすべてなのである。それは、すべての世界になる”と述べる。さらに、Giegerich (1991/2001a 及び 2001b) は、眼前にある対象に専心することで、“意識それ自体がその内容によって「感染」させられるのである。…意識の内容であり、意識の中のイメージである目の前の物それ自体がゆっくりとわれわれのなかに入り込み、われわれの態度や精神の構えの一部、すなわち、まさに意識自体の形式や論理的な構成となる”とも指摘する。つまり、一つの現象に専心することは、“これまで内容であったものが、自分がものを見る見方の枠組み”になることなのである。これは、心理療法において、ある対象や出来事に専心し続けると、眼差される対象や出来事であったものが、それを眼差しているセラピスト(あるいは、クライエント)の意識や、ものの見方になっていくことを意味していると言えよう。こうした考えに基づけば、心理療法の「内」や「外」とは、あらかじめ決まっている固定的なものではなく、セラピストやクライエントが何をテーマと考え、どのような出来事を重要と見なすかによって、いわば、心理療法の「内」というレトリックに何をに入れるかによって、自在に変わりうる流動的なものと言うことになる。そして、レトリックに入れられ、コミットされた「内」こそ、すべての世界、全体の世界となり、文字通りの「内」と「外」は消え去るのである。“たとえそれがいわゆる「外側」の出来事であっても、われわれセラピストがそれを「内側」の出来事として捉えようとする心理学的な態度を保持する限りにおいて、それは「心的なもの」「内的なもの」となるのであって、心理療法にとって〈心/物〉、〈内/外〉といった区分は決して先験的なものではない”(田中,2008)のである。本論では、このような考えに基づいて心理療法を捉える視点を心理療法の「全体を捉える視点」と呼ぶことにする。

以上のように、心理療法における「内」と「外」に対する見方には「内と外に分けて捉える視点」と、心理療法の「内」と「外」を問わず、その出来事に専心することで、「全体を捉える視点」があると思われる。この中で、後者の視点は、心理療法において特に重要になると思われる。というのは、先にも述べたように、心理療法においては、「外」側で起きる変化から「内」側の内容を評価する逆転現象がしばしば起こるからである。一見、「外」の出来事の「内的」な意味を考慮しているように見えても、それはいつの間にか「外」側の価値観や規範に照らし合わされて、その意味が判断される危険性がある。あるいは、いわゆる心理療法の「外」がレトリックに入れられない、心理療法の「内」のこととしてコミットされない場合があるからである。

そこで、本論では選択性緘黙の小学生男児 A との遊戯療法過程を「内と外に分けて捉える視点」と「全体を捉える視点」各々の視点から検討し、二つの視点では、遊戯療法における「内」と「外」の捉え方がどのように異なるか、また、その結果、二つの視点からは、どのように遊戯療法の流れが異なって捉えられるか具体的に示すことにする。さらに「ドン・ローロのつぼ」という昔話を二つの視点から検討し、各々の視点を持つことで、セラピストの在り方にはどのような違いが生まれうるかについても検討することにする。そして、これら2つの素材を通して「内と外に分けて捉える視点」が孕む問題点と「全体を捉える視点」の持つ意義を明らかにすることを試みたい。

各々の視点から選択性緘黙の事例検討を行うには、まず選択性緘黙とは一体どのようなもの

か、その理解を深めておく必要があると思われる。そこで、事例検討に先だって、選択性緘黙という症状を持った子どもたちが生きる世界について考えていきたい。

2. 事例の検討を通して

(1) 緘黙という在り方

選択性緘黙とは、DSM-IV-TR (2002, American psychiatric Association) によれば“他の状況では話すことができるにもかかわらず、特定の社会状況（話すことが期待されている状況、例えば、学校）では一貫して話すことができないことが持続する”状態である。彼らのこうした在り方は、一見、他者との関わりを閉ざしている、あるいは、世界から引きこもっているような印象を与える。しかし、緘黙とは“世界から退却することなく、世界の中に安住する” (大井,1982) 手段であると言われるように、彼らは、完全に他者とのかかわりを閉ざしている、完全に世界から引きこもっているというわけではない。彼らは他者と関わろうとし、また世界に確かに存在しようとしているのだが、その他者や世界との関係において、自身の姿が顕わになることを恐れ、避けているのである。彼らは“絶対に自分の内側を見せない”という強くて固い意志” (田熊,2008) を持ちながら、それでいて、自身の内側を見せずには決して成り立たない「関わり」をどこかで切望している。そうした矛盾を生きる方法が緘黙という在り方であると言えよう。

こうした矛盾は、彼らとの面接においてもしばしば見て取れる。そのひとつの具体例を挙げよう。言葉を発することができない彼らとの関わりにおいて、クライアントとセラピストの間で言葉が交わされることがない状態が続くことは決して珍しいことではない。ところが、面接が重ねられていくうちに、彼らはホワイトボードや画用紙に文字を書いてセラピストに何かを伝えることがある。あるいは、保護者から『クラスメイトと直接話ではできないのだが、最近、手紙や交換日記などのやりとりを始めた』と報告されることもある。このように彼らは何かを伝えるのに、まず声ではなく文字を用いるのであり、文字とは、他者の前に現前せずとも、自身の意を伝えることを可能にする手段であり、まさに自身の姿を顕わにせずに、他者や世界との関わりを持つという彼らの矛盾を成立させる一つの方法といえるだろう。

McLuhan,M (1964,1987) は“メディアはメッセージである”と述べ、一般的に他者に伝えられる「内容や意味」こそが、メッセージであると考えられているが、その内容や意味を伝える「方法や形式」、つまり、どのような手段でその内容が他者に伝えられるのか、そのこと自体にすでに何らかのメッセージが含まれていることを指摘している。このような指摘に鑑みれば、選択性緘黙のクライアントが、声ではなく、文字という手段で何かを伝えようと試みるそのこと自体に、彼らの他者との関係の持ち方が、そして、世界との関わり方が反映されていると言えるだろう。そこで、声と文字が持つ特性を対比し、声や文字の世界を明らかにすることを通して、選択性緘黙という在り方がどのようなものか検討していきたい。そして、さらにそこから、彼らとの心理療法の可能性についても考えることにする。

(2) 声と文字から見た緘黙の世界

“声の生命は発し終えられた瞬間に、何の痕跡も残さずに消えてしまう”(川田,1988)。それゆえ、声は「その時、その場で、その人」に向けて発せられる必要がある。語り手と聞き手が互いに現前していなければ、声は成立しないのである。このような声に対して、文字は“そのことばを、視覚的な場に永久に固定”(Ong,1982/1991)することで、「いつか、どこかで、誰か」に読まれることを可能にする。つまり、文字においては、それが書かれる瞬間に読み手は存在しないし、それが読まれる瞬間には書き手が存在しない。それゆえ、文字が書かれる際には、書き手は“虚構の[読み手や聞き手としての]人や人びとをとひねり出す”(Ong,1982/1991)ことになる。文字は、自分の作り出した虚構の他者と自分とが対話することで生み出される。つまり、文字はそれが書かれる時、自分だけの世界、自分しかいない世界を作りあげると言えよう。

もちろん文字だけに限らず、声が発せられる際にも、その前には虚構の他者に自身の声がどのように受け取られるかは考えられているだろう。文字であれ、声であれ、自身の内に作り出した虚構の他者がどのように自身の文字や声を受け取るのか想定することで、発せられる声の調子や言葉の内容や表現が決まるのである。しかし、いくらそのような想定を行ったとしても、現実の他者が自身の言葉をどのように受け取るかは決してわからない。それゆえ、文字や声が発せられるには、虚構の他者が自身の声をどのように受け取るのかを想定すると同時に、その想定が放棄されなければならない。想定を放棄し、最終的に自身の発した文字や声はどう受け取られるかについては、実際の他者に委ねるしかない。そして、そのような形で、文字や声が他者に委ねられた時にこそ、それらは初めて「言葉」になると言えよう。

緘黙とは、この想定を放棄できないことに関係していると思われる。緘黙は、自分で作り出した虚構の他者と対話し続け、最後まで想定を放棄することができないのである。それゆえ、こう言えばああ思われる、ああ言えばこう伝わる…など、延々と自身が作り出す様々な想定にとらわれてしまうのである。彼らは、自分しかいない世界から脱け出ることができないのである。“緘黙の殻”(山中,1978)とは、彼ら自身が突き破ることができない殻とも言えるだろう。また、緘黙の子どもたちは、他者を自分のペースに巻き込んで支配する“肥大した自我”(弘中,1985)を持つと言われたり、“発話を制止することにより、対象の関心を引き、魔術的に欲求を読みとらせかつ満たしてほしいという、いわば「陰性の強要」”(石谷,2005)を行うと言われたりするが、彼らの自分しかいない世界、自分だけの世界が、このような臨床像の記述に繋がっているとも思われる。

さて、声には、このような自分しかいない世界の殻を割ること—想定を放棄し、虚構の他者を打ち破ること—を助ける現実の他者がいる。現前する他者は、時に想定をあっけなく裏切る。それによって、話し手の意図を超えた(意図に反した)思いもよらぬ事態が起こるのである。そうした思いもよらぬ事態を話し手が目の当たりにし、引きうけることによって、声による対話は多様な方向に展開し、創造的なものになると言えるだろう。

それに対して、虚構の他者しかいない文字においては“その話しが、すべての可能な読者に対してすべての可能な状況において持つだろうすべての可能な意味を、書き手は予見しなければならない”(Ong,1982/1991)。つまり、文字はますます虚構の他者をつくり上げ、自分だけ

の世界の殻を厚くしていかなければならないのである。さらに、文字においては、それが読まれる時に、書き手が不在である。“そのテキストを書いたあとこれを読み、新たに把握し直そうとする者を無関心の権威でもって排除する” (Blanchot,1955/1976) と言われるように、文字は“あたかも生きているかのようにきちんと立っているけれども、君が何かをたずねてみると、いとも尊大に、沈黙して答えない” (Plato,1973/1974) し、“完膚なきまでに反駁した後でも、あいかかわらず全く同じことをテキストは語り続ける” (Ong,1982/1991) のである。このように「その時、その場で、その人」に対して自分の姿を見せない一方で、書かれたものは、読み手に対して一方的に自分の世界を示し続ける文字の特質は、緘黙の在り方そのものように思われる。

さて、ここまで声と文字を対比してきたことで、選択性緘黙の遊戯療法における二つの可能性浮かび上がってきたように思われる。その一つは、「気がつけば声の世界にいること」である。つまり、虚構の他者を想定する間もなく、自分しかいない世界の殻が割れて、現実の他者が存在する世界に表われ出てしまうことである。その具体例としては、失錯行為などが挙げられるだろう。失錯行為とは、気がつけば、自身の意図を超えた思いもよらぬものが表われ出ていることである。遊戯療法の実際の場面で言うなら、お互い真剣にゲームに取り組んでいる中、セラピストがゲームに勝って思わず喜ぶと、負けたクライアントが思わず泣き出してしまうこと、セラピストが意図せずして失敗した姿を見て、クライアントが吹き出して笑ってしまうこと、流れの中でクライアントが緘黙であることを忘れて、セラピストが何の気なしに話しかけると、クライアントも自身が面接室で話をしていなかったことを忘れていて、ふと返事をするなどである。このような意図を超えた思いもよらない瞬間に一つ一つ出会うことが選択性緘黙の遊戯療法においては、重要になると思われる。それによって、“緘黙の背後に「滞っていた」未分化で圧倒的な「感情的なもの」「動物的・本能的・衝動的なもの」「攻撃・活動・破壊エネルギー」「甘え」などが“通る” (大場, 2005)、あるいは“水路づけ” (河合, 2005) され、「流れていく」機会が生まれるのである。

そして、もう一つの可能性は「文字の世界を徹底すること」である。つまり、虚構の他者との対話を徹底的に行い続けるのである。虚構の他者との対話は、彼らの不安からはじまるもので、その対話への囚われこそが、緘黙の世界である。しかし、その不安に飲み込まれて、あらゆる状況を想定し、あらゆる表現を考え、すべての文字を検討しつくすこと－緘黙の世界や文字の世界を突き詰めること－を目指すのである。書き手が伝えたい結論を正確に伝えるために、思いもよらぬ読まれ方されることを避けるために、あらゆることを想定し、全体を俯瞰し、整合性や連続性を持つ構成を考え、より一層の客観性や正確性を持って、一筋の流れに従って論を呈示することを目指すのである。それが完全に徹底してなされた時に、初めて、ありとあらゆる手段を尽くしても、自身が発する言葉を他者がどう受け止めるのか、それは自身にはどうしても確実なことはわからないことが顕わになると言えよう。それは、自分だけの世界が崩れていく瞬間である。

また、徹底して自身が書いたものの行く先を見つめるのである。そうすると、書かれたものが意味を持つのは、それが書かれた時ではなく、読まれた時であることがわかる。“一編のテキストは、いくつもの文化からやって来る多次元的なエクリチュールによって構成され、これらのエクリチュールは、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をととなえあ

う。しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは…(中略)…作者ではなく、読者”(Barthes,1968/1979)なのである。書かれたものが“生きたコンテクストの中によみがえるための力を手に入れる”のは、“生きた読者の手”(Ong,1982/1991)によるのである。他者の前に自身の姿を表すこと—他者にどう見られるか、どう思われるかを引き受けること—を避けたはずの文字は、書き手が不在であるがゆえに、完全にその身を他者に委ねることになる。その不確実性と流動性に身を任せることになるのである。これは、自分の言えることについては言うが、それについて他者が何を感じ、どう思うかは他者に完全な自由を与えることである。そうすることで、書き手もまた虚構の他者から自由になれると言えよう。

このような具体例としては、先にも例示したクライアントが文字でセラピストに何かを伝え、それに対してセラピストが口頭で返事をしたり、質問したりする関わりが考えられよう。このようなやりとりを続けていると、クライアントがある時、文字を書くのではなく、突然話をはじめることがある。このような例は、一見「文字の世界の徹底すること」の例ではないように思われるかもしれない。というのは、セラピストの関わり—クライアントの書いた文字に即座に応答する—によって、クライアントの書く文字が、文字と声の中間対象のように機能した結果、次第にクライアントが安心して、「声の世界」に身をおけるようになったとも考えられるからである。しかしながら、このような考えは、セラピストから見た彼らの体験であるように思われる。緘黙のクライアントが眼前にいるセラピストに声ではなくあえて文字で何かを伝えるのは、もちろん何かを伝えたいという思いはあるが、それ以上に、できるだけ自分の姿が顕になる手がかりを与えたくないという思いに起因する。つまり、クライアントの体験においては、文字によるセラピストとの関わりとは「文字の世界を徹底すること」なのである。彼らはしばしば、そのような文字のやりとりをやめ、話しを始めた理由として、「文字を書くのが面倒で、口で言った方が早いと思ったから」、「文字では微妙なところが伝えきれないから」などと述べる。これは、セラピストの関わりによって、彼らが文字の世界から徐々に声の世界に足を踏み入れるようになったというよりは、彼らが文字の世界を徹底したがゆえに、それが崩れた、あるいは放棄するに至ったと考えられるだろう。このように、「文字の世界を徹底すること」は、結果的に文字の世界が崩されること、殻が割れ、表われ出ること、「流れていく」ことに繋がると言えよう。

(3) 小学生男児 A の事例の概要

さて、ここで本題に戻って、これまで概観してきた緘黙の世界を踏まえた上で、選択性緘黙の小学生男児 A の事例を「内と外に分ける視点」と「全体を捉える視点」から検討していく。面接経過の中で、A は下痢がとまらず、入院することになる。今回は特にこの「下痢による入院」という事態に着目して、両者の視点の違いを明らかにすることを試みたい。「下痢による入院」は、見方によっては、心理療法の流れとは関係のない A の器質的な問題によって起きた単なる「外」の出来事とも言えるし、治療関係によって生じた「内」が溢れた結果としての「外」とも言える。もちろん「内」や「外」と分けて考えることをせずとも、その出来事自体に専心することで、全体を捉えることに繋がる出来事でもある。このように様々な観点から考えることを許容するため、この事例は両者の視点を比較検討していくのに適していると思われる。な

お、事例の提示に関しては、必要最低限と思われる、入院前後に A が繰り広げた遊びを中心に記述することにする。

【事例の概要】

小学校入学時より選択性緘黙症状を呈していた A は、小学校 3 年生終わり頃から不登校となり、相談室に来談した。遊戯療法が開始されて数カ月、A はプレイルームで言葉を発するようになり、また、部屋の中でコロリと寝転がって「何しよう」と言うなど、緩みを見せ始めていた。そして、この頃より A はプラモデル作り（#18 - 21）、レゴで完成したプラモデル用の基地作り（#22 - 24）に取り組み始めた。A はこれらの作業が「苦手」であり、しばしば行き詰り、その度に「お腹が痛く」なって、トイレに行ったり、「できない～」と床の上を転がったりしていた。そのような A に対して、セラピストは、プラモデルの設計図の読み方を説明したり、基地作りを手伝ったりするなどしながら関わっていた。A はセラピストの説明や手助けを得ながら、ガンダムや戦車などのプラモデルを次々と作り上げ、またそれらが「出動するまでいる基地」も完成させた。

この「基地」を完成させたセッションの終わり際、A は「今から 2 週間入院」（#24）と語って帰っていった。ここ数週間、A は下痢が止まらない状態にあったため、検査入院することになったのである。この検査入院には、A が先天的に抱えていた尿崩症という病が関係していた。尿崩症とは、先天的に尿量を調節するホルモンが欠乏、あるいは、腎臓が尿量を調節するホルモンに反応しないために、本来身体に保持されるべき水分が尿として大量に排出されてしまう病である。そのため、A はしばしばトイレに行かなければいけなかったし、同時に、必要な水分を体内に保持しておくために、常に水を飲まなければならなかった。つまり、A は出しては飲む、飲むでは出すということを否応なく繰り返さなければならなかったのである。このような病を抱えた A にとって、下痢によって水分がいつも以上に流れ出てしまうことは、身体に必要な最低限の水を保持できなくなってしまう危機的な事態であった。それゆえ、A は入院することになったのである。

2 週間にわたる入院を終えた後、遊戯療法は再開された。A は入院について「思ったより悪くなかった」（#25）と語った（後日の検査結果によれば、A の下痢には医学的な問題は見当たらず、精神的な影響が指摘された）。そして、再び様々な遊びを繰り広げた。A は「TV で見てやろうと思ったことがある」と容器に水ノリを注ぐが、そこで手を止め「これに何か入れたら固まっているんな形にできる。TV を見た時に、ここに材料があるからできると思ったんやけど…。何やった？」とセラピストに尋ねる。しばらく考えるが、結局、2 人ともその材料は何かわからず、それは作ることができないままとなった（#26）。また木片で「家づくり」（#27）も行った。彫刻刀で削り、木片同士を組み合わせようとしたり、ボンドで繋ぎ合わせようとしたりするが、「壁」はどうしても上手く建てることができずに、結局、家が完成することはなかった。

その後、A は部屋を暗くして隠れん坊を行うようになった。A は真っ暗な部屋の中で息をひそめて隠れ、ボールを投げ、離れた場所で音をたて、自分がいる場所を分からなくする「フェイント」、そして、大きな人形をあちこちに置く「ダミー」を使いながら、隠れん坊を続けた（# 32、33）。

(4) 「内外に分ける視点」から事例を考える

筆者は以前、A が「下痢による入院」に至るまでの経緯、および、その後の事例の展開に

ついて考察を行っている（高嶋,2007）。それは明確に意識されてはいなかったものの、心理療法を「内外に分ける視点」から行われた考察であった。そこで、本節では、より明確にそして詳細に心理療法を「内外に分ける視点」から、この事例の展開について考えることにする。

先にも述べたように、選択性緘黙の遊戯療法においては、「流れていく」ことが大きなテーマとなる。ところが、尿崩症という病に集約されるように、Aは常に流れ出てしまう世界を生きていた。常に流れ出てしまえば、「流れていく」ことを改めて実感することは難しい。流れが止まっている状態、保持される状態があって、初めて「流れていく」ことを感じるようになる可言えよう。このような意味で、心理的にも身体的にも様々なことを「保持すること」がAの遊戯療法におけるテーマになると考えられた。流動的な「声の世界」に身を置くには、まず確固とした「文字の世界」が形作られることが重要になると考えられていたのである。

面接を重ねるにつれ、Aは部屋の中でコロリと寝転がるなど、徐々にプレイルームの中で自身の姿を顕にするようになった。そのような中で、Aはプラモデルや基地作りなど、「保持する器」を作ることに取り組みはじめた。プラモデルとは、設計図を読みながら、多様な部品を正確に組み立て、整合性のある、あらかじめ決まった形を作る遊びである。加えて、Aの選んだプラモデルはガンダムや戦車といった硬い装甲を持つものであった。プラモデルが完成すると、Aは再びレゴの壁に囲まれた基地を作り始めた。ここには、客観性や正確性を持って一つのまとまった形に向かっていくこと、硬い殻で自分の身を守ろうとするといった、「保持すること」や「文字の世界」が表われ出ている可言えよう。しかし、Aはこれらの作業が苦手であり、どれ一つ上手く完成させることができなかった。セラピストは「保持すること」、まず「文字の世界」を形作ることが遊戯療法のテーマになると考えていたために、Aがそれらを上手く作れないことにもどかしさを感じた。そこで、セラピストはAが保持する力を持つことを望んで、Aに作り方の説明や手助けを与えたのである。つまり、セラピストは、保持する器を持つことができないAのありのままを抱えきれなかったのである。Aは面接において、表面上は、説明や手助けを受け容れ、次々とプラモデルや家、つまり、保持する器を完成させ、「文字の世界」を形作っていった。しかし、その一方で、Aは下痢がとまらなくなり、入院しなければならなくなった。セラピストが与えた説明や手助けは、Aにとっては、十分に消化できないものだった可言えよう。入院はAの不安を喚起する出来事であったが、結果的にそれは母親との時間を存分に過ごせ、下痢という適切にまともならず流れ出てしまう状態がそのまま抱えられる体験となった。

心理療法を「内と外に分ける視点」から捉えると、この事態はセラピストが心理療法の「内」において抱えるべきことを抱え切れず、Aが十分に消化できない説明や手助けを与えたために、「下痢による入院」という形で心理療法の「外」にあふれ出ってしまった出来事である。「内と外に分ける視点」において、「外」に溢れ出たものは再び「内」に戻して活用されなければならない。それゆえ、セラピストは、「下痢による入院」をこれまでの面接経過やセラピストとの関係性に対するAの無意識の訴え、身体を通したメッセージとして受けとめ、セラピスト自身の在り方を振り返る契機とした。そして、“乳児は不快な感情を母親の乳房に投射する。母はそれを念入りに磨き上げ、そして適切な応答を返すならば、乳児は母の乳房を自分の感情を扱う「器」として取り入れることができる”（Segal,1978/2001）と考えなおし、以降の面接では、

まずセラピスト自身が、器を持ちえない、文字の世界や声の世界を未だ形作れない、ありのままのAを抱える器として機能することを心がけたのである。

退院後、再開された遊戯療法において、これまでと同じように、ノリを固める材料を思い出せない、壁を建てることができず、家が作れないことが起こった。しかし、今度は、セラピストはAに説明や手助けを与えるのではなく、形としてまとまらないこと、器が作られないことそのこと自体を抱える、あるいは、それに伴うAの悔しさや悲しみをそのまま抱えた。こうした関係性の変化に伴って、次第にAはフェイントでもダミーでもない、ありのままの自分自身をセラピストに見出される遊び、隠れん坊を行うようになったのである。

このように「内と外に分ける視点」においては、心理療法の「外」に溢れたでた「下痢による入院」は、改めてクライアントの状態やセラピストの在り方を振り返る契機として活用された。それによって、Aが「保持すること」を目指すのではなく、まず、保持することができないAをセラピストが保持するという気づきが得られた。そして、「外」に溢れ出たものは、再び「内」に結び付けられ、その後、心理療法は大きく展開し始めたと考えられたのである。

(5) 全体を捉える視点から事例を考える

では、続いて、これらの事例展開を「全体を捉える視点」から検討する。Aの「下痢による入院」を「外」に溢れ出たことと見なしたり、「内」における面接の在り方や関係性を考え直す契機と考えたりするのではなく、あくまで、「下痢による入院」そのこと自体を心理療法の「内」というレトリックに入れ、専心するのである。では、「下痢による入院」自体が持っていた意味とは一体何であろうか。下痢とは、本来まとまり、形になるものが、自身の意図を超えて、形にならずそのまま流れていくことである。そして、入院とは、AやセラピストがAの身体にそうした「流れていく」ことが起こっているという事実と直面させられる機会である。つまり、「下痢による入院」とは、まさに考える間もなく、自身の意図を超えて流れていくこと、「気がつけば声の世界にいること」を意識させる出来事と言えよう。そして、Aの身体が彼の意識に先んじて、自身にとって必要な在り方をすでに実現していた出来事とも言えるだろう。

ここで、もう一度、入院に至るまでの面接の経緯を振り返ってみる。面接を重ねるにつれ、Aは部屋の中でコロリと寝転がるなど、身体を緩めていた。気がつけば、今まで固まっていたものが、少しずつ緩み、流れ始め、「声の世界」が立ち現われはじめていたのである。その中で、Aは客観性や正確性に満ち、一筋の流れにそって形作られるプラモデル、硬い壁で自分を守りもするが、封じ込めもする基地作りを行い、「保持すること」や「文字の世界」を志向したのである。そして同時に、この時、セラピストはAにプラモデルや基地づくりの説明や手助けを与えた。それは、Aを包み込み、保護しよう、出来事を確実に進めようという試みであり、セラピストもまた「文字の世界」を志向したのである。こうしたAやセラピストの「保持する」という意図、「文字の世界」の徹底が、反対に遊戯療法の当初からの目的「流れていく」こと、文字の世界が崩れていくという動きを強めることになった。その結果、2人の「保持しよう」という意図に反して、Aの身体において、彼に必要なこと、つまり自身の意図を超えて、形を成さないまま流れ出るといふ「声の世界」の表われが下痢という形で結実したのである。

Aの入院後、先にも述べたように、セラピストは態度を変え、ありのままのAを受け入れ

ようとした。これは「保持、保護しようとする」と崩れ、流れていく」という遊戯療法本来の流れによって、セラピストの在り方が変えられたと言えるだろう。セラピストが溢れ出た「外」を「内」戻すことによって、遊戯療法の流れを変えたのではなく、遊戯療法の流れがセラピストの在り方を変えたのである。そのことを示すかのように、遊戯療法の「流れていく」という動き自体はAの入院前、入院後、変わることなく一貫していた。退院後も、入院前と同様に、まとめようとする、まとめる材料を思い出せない、家を作ろうとすると壁が立たないという遊びが行われ、殻は破れ、流れ続け、「声の世界」は表われ続けたのである。そして、セラピストが説明や手助けを与えなくなったことで、結果的にAは形作ろうとしても形作れない自身、保持しようとしても保持することができない身体に改めて直面することになったのである。

その後、行われた隠れん坊はまさに本来の自身の姿を見出す（見出される）遊びである。この時、Aは、単純に隠れるのではなく、自分がある場所を分からなくする「フェイント」や自分の代わりとなる「ダミー」を用いて隠れていた。Aは、これらの遊びで、形作れないにもかかわらず、形作れるようにみせかける「フェイント」や、保持することができないけれども保持できるように思わせる「ダミー」が見破られることの必要性を表現したのかもしれない。また、フェイントやダミーとは、本当の自分があること、つまり、本来の自身の姿がなければ成立しないものである。Aは抱えることのできない本来の自分の姿を自覚しつつあったのかもしれない。このように、「全体を捉える視点」からすれば、Aとの遊戯療法には「気がつけば声の世界にいること」「文字の世界を徹底すること」という2つの動きによって、「流れていく」ことが一貫して起こり続けていたと捉えられるのである。

(6) 考察 — 「内と外に分ける視点」の抱える危険性と「全体を捉える視点」の可能性—

「内と外に分ける視点」と「全体を捉える視点」それぞれから、事例を検討してきた。この章の終りに両視点の違いを今一度整理して、前者の問題点に言及する。

先に、選択性緘黙の心理療法において重要なのは、確固とした装いによって、自身の姿を隠してしまうのではなく、いかに思いもよらず自分の姿を見せてしまうか、いかに「流れていく」かであると述べた。「下痢による入院」とは、自身の意図を超えて、形にならないものがそのまま流れていくことに直面し、自覚せざるを得ない出来事である。その意味では、「下痢という入院」はAの身体は危険にさらされたが、Aにとって必要な内的作業が成し遂げられていると言える。

では、なぜ当初、「内と外に分ける視点」においては、「下痢による入院」が、それまでの遊戯療法の経過を振りかえる契機と考えられたのであろうか。ここに心理療法を「内と外に分ける視点」の危険が潜んでいるように思われる。心理療法を内と外に分ける発想は、どこかで心理療法の本来あるべき流れ「心理療法の内」と、本来あるべき流れから逸れている状態である「心理療法の外」を生みだしてしまうのである。内-外という二分法は、優-劣、良-悪、正-誤、美-醜、上-下、重-軽といった他の二分する発想と容易に結びつく傾向があると言えよう。それゆえ、気がつかない間に、優れていて、良くて正しい美しい本来あるべき心理療法の「内」が想定されてしまうのである。したがって、「下痢による入院」という「外」の出来事は、それが身体的な危機であることも手伝って、劣っていて、悪くて、誤っている否定的な

ことと見なされたのである。それゆえに、否定的な「外」が起こった時に、それを引き起こしたであろう「内」における要因や治療者側の寄与が振り返って探されたのである。そうすることで、セラピストがAに消化できないものを与えていること、文字通りの保持する器を手にしようにしていたことが発見された。そして、否定的な「外」を反省し、「内」におけるセラピストの在り方を変えたことが、心理療法の「内」を再び肯定的な本来あるべきものに戻したと考えられたのである。しかし、“「否定的な」イメージを単に一時的なものとして、途中の段階の表現とみなして、その後に「肯定的」で「展望的」なイメージが続くことを望んでいる”と“否定的なものの価値は貶められて”しまうことになる（Giegrich,2000）と言われるように、たとえ「下痢による入院」が、身体の危機を伴う否定的なことであったとしても、否定的な「外」は、肯定的な「内」の途中段階の表現、肯定的な「内」を呼び寄せる契機ではないのである。

入院前、Aが苦手であるにもかかわらず行ったプラモデルや基地作りは、セラピストが手助けしなければ完成しなかったはずだった。また、Aの身体は保持する器を持つとしても、どうしてもそれを持つことができなかった。このように、「下痢による入院」以前から、形にならず、保持されず、「流れていく」ことはすでに起こっていたのである。そして、それと同様のことが、より強調される形で、下痢という形になって表われたのである。つまり、「保持すること」や「文字の世界」にコミットし、それを目指すこと、結果としてそれが崩れて「流れていく」という動きは最初から起こっていて、Aの「下痢による入院」もその同じ流れの中で起こった出来事の一つだったと考えられるだろう。それゆえに、退院後も同じ「保持しよう」とすると「流れていく」というテーマが変わらずに遊びの中に表われたのである。「全体を捉える視点」からみれば、「下痢による入院」は決して心理療法の流れを変える大きな転機だったとは言えないのである。むしろ「全体を捉える視点」からすれば、「下痢による入院」という否定的に思われるような形においても、遊戯療法におけるテーマが実現していたと見なすことができるだろう。

こうした考えからは、心理療法を「全体として捉える視点」は、一般的な価値観からすれば否定的・危険を伴うと思われる出来事においても、クライアントにとっての重要性や心理的な意味を見出すという点において意義を持つ可能性が示唆されるように思われる。この点に関しては、章を変えてさらに考察を深めていきたい。

3. 「ドン・ローロのつぼ」の検討を通して

さて、前章においては「内と外に分ける視点」と「全体を捉える視点」では、事例がどのように異なる意味をもって立ち表われるかを示し、前者の問題点と後者が持つ可能性に言及した。そして、その中では、「全体を捉える視点」が肯定的-否定的という一元的な価値観を超えて、心理療法で起こっている現象自体を捉える意義を持つ可能性が示唆された。

しかし、先の検討からは、以下の点についての疑問が残ったままであると思われる。その1つは、先の事例では、クライアントと実際に会っていた際には、セラピストが「内と外に分ける視点」を持って関わっていたこともあり、「全体を捉える視点」を持った際のセラピストの在り方がどのようなものか不明確である、あるいは、どちらの視点を持ってセラピストの

在り方には違いはないのではないかという疑問である。2つ目は、先の事例における「下痢による入院」については、結果的にセラピストの在り方を振り返る契機になったという点では、肯定的な出来事とも言えるため、「内と外に分ける視点」を持っていたとしても、この出来事自体をそれほど否定的なこととしては捉えないのではないか、したがって、「全体を捉える視点」は、本当に否定的に思われるような出来事であっても、起こっている現象自体を理解するのに役立つのかという疑問である。そこで、本章では、新たに“ドン・ローロのつぼ”（飯野,1999）というシチリアの昔話を素材として、こうした疑問点について、さらなる検討を重ねることとする。

“ドン・ローロのつぼ”とは、素晴らしい壺が壊れてしまったドン・ローロと壺を直しに来たディーマじいさんとの関わりが描かれた物語であるが、物語の中で、ドン・ローロやディーマじいさんは、一般的には否定的と捉えられる行動、あるいは、破壊的にさえ思われる行動をとる。それゆえに、この物語は「全体を捉える視点」が、本当に肯定的－否定的といった判断にとらわれずに心理療法で起こっている現象を捉えることができるかを検討するには適しているように思われる。また、壺を修理しに来たディーマじいさんの在り方をセラピストに擬えて検討すると、「内と外に分けて捉える視点」と「全体を捉える視点」という各々の視点を持つことによって、セラピストの在り方もまた違ったものになることが明確になると思われる。加えて、壺の修理にかんする物語は、当初、器を「保持すること」が重要であると考えられていたAとの遊戯療法のテーマと重なり合う部分が多いため、物語の考察を深めることが、Aの事例をより深く理解することに繋がると思われる。新たな素材を用いた検討および考察を行うのは、こうした理由による。

“ドン・ローロのつぼ”は短い昔話なので、物語全文を3期に分けて提示し、そのつど考察を加えていくことにする。

(1) 怪しい黒雲と割れた壺

ドン・ローロのお屋敷に特別注文の大きな壺が届きました。壺には今年とれたオリーブの油を入れるのです。ドン・ローロは嬉しくて、思わず壺を叩いてみると、ゴーンと教会の鐘のような美しい音が響きました。「おお！なんて素晴らしい壺なんだろう」。ドン・ローロはうっとり。「そら、そら、気をつけてな」。「ほらしよ、ほらしよ」。大切に壺は広場に置かれました。

ところが、真夜中を過ぎた頃、怪しい黒雲が降りてきてふっと消えると、壺は真っ二つに割れていたのです。「大変だ」。朝になったら大騒ぎ。「だ、だれの仕業だ」。ドン・ローロが恐ろしい声で怒鳴りましたが、誰もわかりませんでした。だって壺は不思議な力で割れたのです。「だんなさま、こういうときは、隣り村のディーマじいさんに頼みましょう」と一人の男が言いました。次の日、ゆったりゆったりと、ディーマじいさんがやってきました。ドン・ローロが「本当にお前が直せるのか」と何度も言うので、むっと、ディーマじいさんはドン・ローロをにらみつけました。

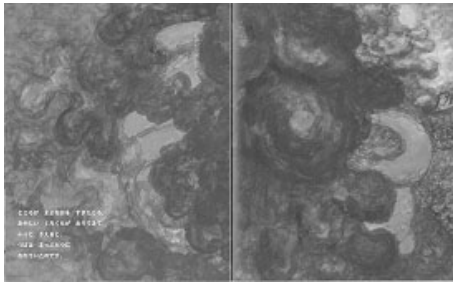


図1：怪しい黒い雲

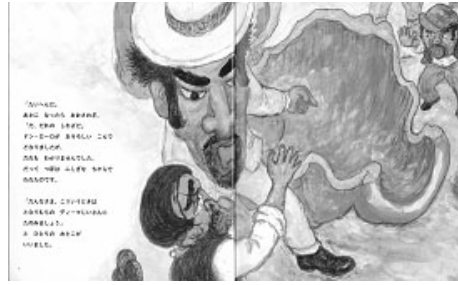


図2：怒るドン・ローロ

ドン・ローロが買った素晴らしい壺は、ある夜、怪しい黒雲によって壊されてしまう。ドン・ローロは、突如として、人知を超えた不思議な力によって、理不尽にも大切な壺を壊され、怒りや悲しみを抱えた者となったのである。そして、「こういうとき」に「頼み」になる者としてディーマじいさんが登場する。ディーマじいさんは、ドン・ローロの「本当に直せるのか？」という問いに対しては、「むっとにらみつける」のみで、明確には答えず、黙ったままであった。

この状況は何らかの事情で外傷を負ったクライアント、大切なものを喪失したクライアントが、セラピストの前に表われる場面と似通っている。先のAの事例でいうならば、Aは理不尽にも生まれながらにして、身体に水を保持できない、つまり壊れた器（壺）を持って生きねばならなかった。そして、言葉を発することで生じる他者との、あるいは、自分自身との間に走るズレや亀裂を目の当たりにすることを恐れ、Aは言葉を発することができなかった。Aは壊れた器、そして生きている限り避けようのない亀裂を何とかすることを望み、来談したとも言えるだろう。

来談したクライアントは、セラピストは外傷を負う以前の状態に自身の心に戻すことができる「知識」や「方法」を知っているという幻想を抱いている。しかし、実際にはそのようなことができないセラピストは、あくまでこういう時に頼みになるもの—実際に壺を直せるものではなく—として紹介され、クライアントに出会うことになる。そして、心理療法は「本当に直せるのか？」という文字通りの問いではなく、それとは別次元の問いに取り組むことになる。例えば、それは、ドン・ローロの人生における目的という大きな観点から、どうして彼の壺は不思議な力によって、壊されなければいけなかったのかという意味を考え、ドン・ローロが彼自身の物語をつくりあげ、理不尽に襲いかかった運命を自身の心の中に収めていくことを見守る、あるいは、大切な壺の喪失という怒りや悲しみに包まれたドン・ローロを抱えながら、大切な壺が決して元に戻らないことを受け入れ、真にそれを諦めるプロセスを共に歩むことなどが考えられる。現実において、外的な壺は壊れてしまったものの、その代わりに、壺が壊れてしまったという出来事を抱える内的な壺をつくりあげようとするのが心理療法では目指されるのである。では、この物語では、ディーマじいさんはどのように「壺の修理」に取り組むのであろうか。

(2) 壺の修理

「ふむ、ふむ」。ディーマじいさんは仕事を始めました。自慢のノリでペタペタと割れたところを塗って、針金でギュイギュイ縫いつけると、見事に壺は元通り。ドン・ローロは大喜びで、「よくやった」と、すぐにお礼のお金をあげました。ところが、おっ、おっ、おっ、ディーマじいさんは壺から出られないのです。もご、もご、あらっ。みんなはおかしくて笑い転げました。「じいさんが入ってどうする」「こんな壺もう使えないじゃないか。ええい、勝手にしろ」と、かんかんに怒ったドン・ローロは自分の屋敷に帰ってしまいました。

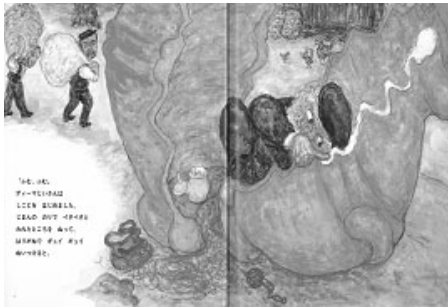


図3：壺を修理するディーマじいさん

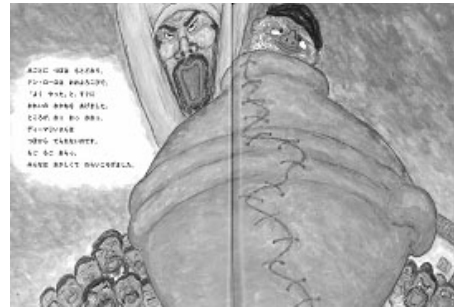


図4：壺の内側に入ったディーマじいさん

ディーマじいさんは、壺の修理を始める。ところが、ディーマじいさんは修理を続けるうちに、気がつくと壺の内側に入っており、そこから出られなくなってしまふ。それによって、壺は繋ぎ合わされ修復されたように思われたものの、結局は「もう使えない」壺となってしまう、ドン・ローロは怒って、屋敷に帰ってしまうのである。

傷を癒したい、壊れたものを元通りにしたい、そのような思いがクライアントを来談に導き、セラピストはそのような思いを真摯に聴く。それは、セラピストが実際にそのようなことが可能な者であるという幻想を引き受けることに繋がる。しかし、面接が重ねられるにつれ、次第に、クライアントは、セラピストも決して文字どおりに傷を癒し、壊れたものを元に戻す「知識」や「技術」を持つ存在ではないことを知るに至る。幻想が崩れるのである。それは、ディーマじいさんが、ノリや針金を使って修理を行ったことで、ひと時の間、ドン・ローロが壺は見事に元通りになったと思ったけれども、実際はディーマじいさんが壺の内側に入っていて、壺が「もう使えない」ことを知ったように、である。あるいは、Aの事例において、プラモデルを組み立てるなど、まとめあげることを通して、一見、保持する器が作られていったものの、下痢という「流れ出ていく」ことが起こり、形作ろうとしても形作れない自身、保持しようとしても保持することができない身体にAが改めて直面したように、である。つまり、クライアントは外的な壺をもはや手にすることができないことを知るのである。そして、その際、セラピストがクライアントの怒りや悲しみを抱えることができれば、次第にクライアントが内的な器を持つことが可能になる。したがって、この物語で、ディーマじいさんが壺の内側に入った姿を見て、ドン・ローロが怒りを投げかけたことは、心理療法が進展している証とも言えるだろう。では、ディーマじいさんは、この後、どのようにドン・ローロの怒りと向かい合うので

あろうか。

(3) 宴会と壺を割ること

ディーマじいさんはもらったお金で、ごちそうとワインを買って宴会を始めたのです。みんなは大きな声で歌を歌い、おかしな踊りを踊りながら、いっせいに、大きな声で笑いました。いつもだったら寝る時間なのに、こんなことをしているのです。この騒ぎで、ドン・ローロは目が覚めました。すると、いきなり寝間着のまま、壺をめがけて牛のように突進したのです。「あーっ」(図5)。ドゥッシャーン。壺は粉々に割れました(図6)。そしてディーマじいさんが笑いながら出てきたのです。〈完〉

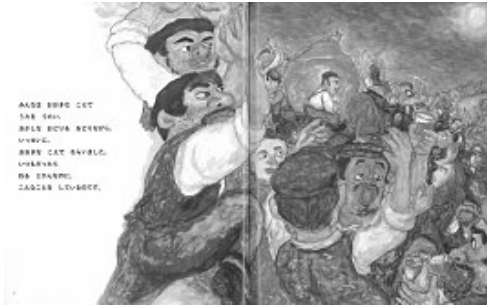


図5：宴会を開く

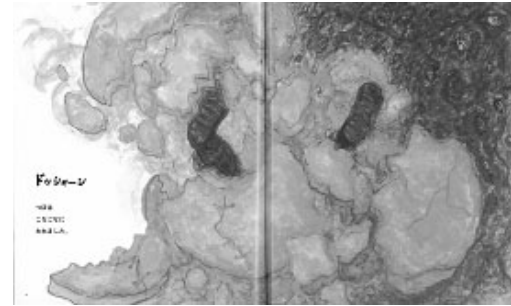


図6：ドン・ローロ壺を割る

ドン・ローロがディーマじいさんに怒りを投げかけ、屋敷に帰った後、ディーマじいさんは宴会を始める。そして、騒ぎによって目が覚めたドン・ローロは、壺をめがけて牛のように突進して、壺を粉々に壊すことになる。心理療法の流れを「内と外に分けて捉える視点」と「全体を捉える視点」との間で、この物語の捉え方に決定的な違いが生まれるのは、ここからであろう。

「内と外に分けて捉える視点」からすれば、ドン・ローロが怒ってその場を去ってしまうことは行動化を起こしている、つまり、心理療法の「内」で扱われるべきことが「外」に溢れ出たことと捉えられる。ドン・ローロが怒りを投げかけることは良いけれども、それをいかに屋敷に戻るといふ行動ではない形で扱えるかがまず重要になるのである。その意味で、ディーマじいさんが、ドン・ローロを屋敷に帰してしまったことは、ディーマじいさんがその怒りを十分に抱えられなかったと見なされるだろう。あるいは、壺の修理中に内側に入ってしまうというディーマじいさんの単純な失敗が、ドン・ローロの不要な怒りを引き出し、Acting outのきっかけを作ったとして、ディーマじいさんの専門家としての在り方が反省されるべきと考えられるかもしれない。

しかし、行動化はすでに起こってしまっている。そこで、行動化は“未分化で衝動性や破壊性を帯びるにせよ、内的世界の1つの表出であり、心的内容をコミュニケーションする媒介と捉えることもできる”(菊池, 2008)と考え、ドン・ローロがこのような行動に至った背景を内省する場を提供する、怒りの言語化を促し、それを共有することなど、行動化の後の対応が重要であると考えられるだろう。Aの事例における下痢と同様に、心理療法の流れの「外」に出

てしまったものを再び「内」に戻して活用しようとするのである。

ところが、ディーマじいさんは、この後、ドン・ローロの怒りを抱えるどころか、ドン・ローロの気持ちに反するような、にぎやかな宴会を開く。これは、ドン・ローロの行動化に対して、ディーマじいさんも行動化を起こしたかのようなのである。あるいは、ディーマじいさんの振る舞いは、もはや心理療法の流れから完全に逸脱した単なる「外」と見なすこともできるだろう。いずれにせよ、「外」にあふれ出たものは、「外」に出たままとなるのである。そして、騒ぎによって目を覚ましたドン・ローロはついに壺を粉々に壊してしまう。「内と外に分けて捉える視点」においては、ドン・ローロの振る舞いは、自暴自棄に陥った破壊的な行動と捉えられ、2人の関係は破綻し、心理療法は失敗に終わったと考えられるだろう。この物語は「外」に溢れ出たものを「内」に取り込むことに失敗した結果、あるいは、ディーマじいさんはそもそも壺の修理工人であって、セラピストではないのだから、ディーマじいさんの振る舞いは、心理療法とは何の関係もない「外」の出来事だったと捉えられる可能性すらあるだろう。

では一方で、この一連の出来事を「全体を捉える視点」から見ると、どのように考えることができるのであろうか。全体を捉えようとするので、ディーマじいさんが壺の内側に入ったこと、ドン・ローロが屋敷に戻ったこと、宴会が開かれたこと各々を「内」なることとみなすのである。このような視点を持つと、この物語は全く別の様相を帯びることになる。

物語の始め、ドン・ローロは不思議な黒雲によって、突然、訳も分からず、大切な壺が割られてしまった。ドン・ローロは抗いようもなく圧倒的な力に弄られ、一方的に災厄を被る者であった。そのようなドン・ローロの前に登場したディーマじいさんは、壺の修繕に取りかかり、気がつけば、壺の内側に入って出られなくなってしまった。そして、ドン・ローロは壺の内に入って出られなくなってしまったディーマじいさんのその姿を見て、壺は「もう使えない」こと、壊れた壺は決して元通りに戻ることがないことを知ったのである。ドン・ローロは、ディーマじいさんの姿を見て、そのような事実を目の当たりにし、壺を諦めようとしたものの、そのことを本当には認められなかった。それゆえに彼は怒りだし、壊れた壺から目を背けるように屋敷に引きこもったのであろう。この時、ドン・ローロは素晴らしい壺を失ったことを“挫折を完全な断念、あきらめという形でしか消化していず、本当の意味で幻滅（幻を滅する）こと”（Giegerich,2000）を行っていないのである。そして、まさにドン・ローロが屋敷に引きこもって、素晴らしい壺という幻に囚われていた時に、ディーマじいさんは宴会を開いた。宴会が開かれたことで、ドン・ローロは幻に囚われた状態から、目を覚まして再び屋敷から出てくる。そして、壊れた壺に再度向かい合い、壺をめがけて牛のように突進し、壺を自ら「粉々に」割ったのである。

同じ壺が壊れた状態であっても、自らが関与することなく、一方的に壺が割られてしまい、壊れた壺を前にしながら、どこかで素晴らしい壺の幻想にとらわれているのと、本当は壺が決して元通りにならないことを知っていることを認めた証として、壺を改めて自ら壊すことでは全く意味が異なる。自ら壺を壊したことは、ドン・ローロが人知を超えた力によって、自らの運命を左右されるしかなかった受動的な存在から、壺の喪失という傷を自らの身体に刻み込もうと壺に飛びこむ存在、主体的に壺を割る能動的な存在に覚醒した証と言えよう。“人間は手に入れたくなるような目標（それが、お金、権力、感覚的満足であれ、永遠の浄福であ

れ)からのいわば吸引力をもはや感じなくなることによって、自ら意志するものとなる。引きつけられている際には、これらの目標が引きつける主体となっていて、人間はこれらに吸引される対象であり、引きつけられるものなのであるのに対して、自らを意志する人間は欲望し、意志するものとしての自分自身と自分自身のものとしての意思をはじめて反省する”(Giegerich,2001c)のである。ドン・ローロは壺からの吸引力を感じなくなり、自ら意志するものになったゆえに、あるいは、自身が持っていた壺は壊れていることを本当の意味で自覚したがゆえに、壺に飛び込んだのであろう。

このように、「全体を捉える視点」から見れば、ディーマじいさんが壺の内側に入ったことは単なる失敗ではなく、ドン・ローロはディーマじいさんの姿を見たがゆえに、壺は「もう使えない」という気付きを得たことが浮かび上がる。さらに、宴会はドン・ローロを幻から解放し、自ら壺を失う作業を遂行させたことに繋がったことが明らかになる。そして、ドン・ローロが牛のように突進して、壺を壊したことは、決して心理療法の失敗ではなく、彼の心的な作業が続けられていることの表われだったと考えられるのである。

(4) 考察 — 「全体を捉える視点」を持つことの意義 —

二つの視点から“ドン・ローロのつぼ”という昔話を検討してきた。セラピストに擬えられたディーマじいさんは「内と外に分ける視点」から見れば破壊的な存在であったし、治療者に喩えること自体疑問が呈されるような存在であった。一方で、「全体を捉える視点」から捉えると、ディーマじいさんという存在そのものが治療的であったことになる。また、壺の修理や二人の関係性についても、前者の視点においては、心理療法の失敗・破綻と考えられたが、後者の視点においては、あくまで両者の関係を通して、ドン・ローロが必要とする心的作業が続けられ、その結果、彼は新たな地平に立ったと捉えられることになる。同じ出来事であっても、各々の視点から捉えると、物語の展開は全く異なったものになること、それと同時に、セラピストとしての在り方も全く違ったものになることが明らかになったと言えよう。さらには、「全体を捉える視点」は、壺を修理するうちに壺の内側に入る・宴会を開く・壺を割るなど、全くの「外」と思われる出来事、あるいは、失敗・破壊など、一般的な価値観では否定的に捉えられがちなセラピストやクライアントの行動や在り方であっても、「外」側の判断や価値観にとられずに、起こっている出来事そのものを捉えることを可能にしたと言えるだろう。

「内と外に分ける視点」からすれば、ドン・ローロやディーマじいさんの行動は、心理療法の「内」が溢れ出た「外」、あるいは、心理療法とは全く関係のない「外」の出来事となるだろう。しかし、クライアントにとって自身の「外」からやってくるように感じられる「症状」が、苦痛や困難を伴うけれども、重要な「内」的な意味を持っているのと同様に、心理療法の「外」であるように思われる出来事は、心理療法の流れの「症状」と捉えることができるだろう。つまり、「外」はたとえ否定的な出来事であっても、排除すべきことでもないし、「内」の誤りの結果でもないのである。それは、クライアントや心理療法の流れにとって、最も本質的なテーマを内包しており、心理療法で起こっていることを読み解く手がかりになるのである。こうした姿勢を維持し続けるためにも「全体を捉える視点」を持つことは意義があると言えるだろう。

4. 総合考察

(1) 「全体をとらえる視点」における心理療法

事例と昔話という2つの素材を通して、主に「全体を捉える視点」の意義について検討してきた。最後に「全体から捉える視点」においては、心理療法をどのような動きとして捉えているかを整理しておきたい。

心理療法は、クライアントとセラピストが各々の意識的な目的や意図をもって始まりを迎える。両者はそのような目的や意図に添って、様々な現象や出来事にコミットしていくことになる。そして、こうしたコミットは、やがて心理療法自体の流れ、心理療法自体の目的をつくりだすことになる。しかし、それは時に個人の意図や目的を超えたもの、あるいは、個人の意図や目的に反したのものにもなりうる。流れを作り出したはずのクライアントとセラピストが、反対に心理療法自体の流れに巻き込まれていくことになるのである。例えば、一つ目の事例において、Aは自分で「苦手」と語っているにもかかわらず、プラモデルや基地作りを行い始めた。Aの「意図」は、苦手ですぐ上手いことを克服し、形作ったり、保持する力を身につけたりすることであったのであろう。そしてセラピストもAが保持する器を手にするという「目的」を持って、Aに手助けや説明を行ったのである。おそらくは、この瞬間に、2人は遊戯療法自体の「流れていく」という目的に巻き込まれていたのではないだろうか。Aからすれば、プラモデルや基地づくりは「苦手」で上手いいかないのだから、最初から取り組まないという選択肢もあったであろう。むしろ、こうした身を隠す選択肢を選ぶのが、いつものAの在り方に馴染むものだったはずである。一方で、セラピストはクライアントの遊びに説明や手助けを行わずに、それを見守るのが基本的な治療スタンスであることを知りつつも、なぜか手助けや説明を与えた。いつの間にか心理療法の目的・流れが2人を突き動かす、2人はなぜかいつもと違うことを行ったのである。しかし、こうした突き動かされた二人の「保持しよう」という意図や行動こそが、同時に「保持しよう」としても、上手いはずなのに「流れていく」という心理療法の流れをより大きく強いものにした。その中で、Aの身体に「流れていく」下痢という症状が起こったのである。

さらに、ドン・ローロの物語においては、より明確にこのような動きをみてとることができる。ディーマじいさんは、頼みになる者として紹介される程の者にもかかわらず、壺を直そうとして気がつけばなぜか壺の内側にいた。そして、ドン・ローロは壺が「もう使えない」と怒って語っているにもかかわらず、つまり、実際には壺の修理がなされていないにもかかわらず、ディーマじいさんにお金を支払ったままであり、そのお金が「宴会」を開くために使われた。ドン・ローロもディーマじいさんも意識的には壺を修理しようという意図や目的を有していたのは間違いないだろう。しかし、そうした2人の意図や目的に基づいた行動が、反対にドン・ローロ自らが「壺を壊しなおす」という、2人の意図や目的を超えた（反した）この物語、心理療法自体が持つ目的や流れを押し進めていったのである。

くしくも Freud が行動化について述べたように、心理療法におけるテーマは、心理療法の「内」においても、「外」においても、同じように繰り返されている。そのテーマをより鮮明にするために、さらには、一般的・客観的ではない心理療法独自の視点からそのテーマを眼差す

ために、心理療法は便宜的に「内」と「外」に区分され、その「内」が重視されたのである。したがって、そこにある本質は心理療法を「内」と「外」に分けることではなく、心理療法に独自のものの見方を維持することであったと言えるだろう。その意味では、「全体を捉える視点」とは、そもそも「内と外に分ける視点」が生み出されることになった原点へ回帰する視点とも言えるだろう。

(2) 心理療法の「内」と「外」という問い

本論の最初に、遊戯療法の「内」なる過程と日常生活におけるクライアントの様子といった遊戯療法の「外」での出来事はどのように結びつくのかという問いがあると述べた。しかし、「全体から捉える視点」を持つことで、このような問いは、われわれが心理療法を「内と外に分けて捉える視点」から眼差しているからこそ生み出される問いであることが浮かび上がってきた。実際に心理療法の「内」と「外」が存在しているわけではなく、「内」と「外」に分けて捉えるから、「内」と「外」の繋がりが問題になるのである。さらには、2つの素材の検討を通して、こうした「内」と「外」を繋げるという発想をもった時に、心理療法は、そもそも心理療法を「内と外に分ける視点」が生み出されることになった「内」の重視という本質とは正反対に、「肯定的－否定的」、「本来あるべき「内」－あるべき姿から逸れた「外」」といった一般的、客観的な「外」の規範や価値観に支配される危険性が明らかになった。

それに対して、たとえ「外」であるように思われることでも、それを心理療法というレトルトの「内」に入れ、専心したならば、それが「全体」となり、文字通りの「内」と「外」は消え去る。こうした「全体を捉える視点」を持つことは、「内」と「外」を繋げようとするところから生じる「内」と「外」の逆転、「外」の適応や好ましい変化のために「内」がある状態から自由になること意味する。そして、一見、否定的に思われるようなことであっても、そのような形でクライアントや心理療法のテーマが実現されている可能性を浮かび上がらせたり、一般的、社会的な価値観とは別の観点から出来事や現象そのものを浮き彫りしたりすると思われる。“現代における道徳的－衛生的立場は、あらゆるものが害になるか益になるか、正しいか正しくないかを常に知りたがる。様々なものがそれ自体でいかに存在しているかを認識すれば心理学にとっては充分”（Jung,1921）なのである。

(3) 終わりに

「内と外に分ける視点」の危険性と「全体を捉える視点」の意義について述べてきたが、「全体を捉える視点」は、内と外に分ける発想を不要と見なすものではない。というのは、レトルトの内に入れられた素材において、その内外について考えられることは意義があると思われるからである。昔話“ドン・ローロのつぼ”において、ディーマじいさんが壺の内側に入ってしまったことなどは、その例として挙げることができるだろう。この物語において、ディーマじいさんが、気がつかぬうちに壺の内に入ったことは、結果的に非常に重要な意味を持っていた。ディーマじいさんが外側から壺を修理すれば、この物語は生まれなかったのである。このように、自分たちが作り出した「内」と「外」の関係ではなく、素材の中において、自ずと生じてくる内と外について考えていくことは興味深いことであり、今後、検討していきたい課題である。

文 献

- American psychiatric Association(2002)Diagnostic and statistical manual of mental disorders Fourth edition Text Revision .Washington, DC, American psychiatric Association. 高橋三郎 大野裕 染矢俊幸(訳):DSM- IV -TR 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- Barthes R(1968):Introduction a l'analyse structurale des recits, Paris, Seuil. 花輪光(訳)(1979): 作者の死 物語の構造分析 みすず書房 pp79-89
- Blanchot M(1955):L'espace litteraire,Paris,Gallimard 粟津則雄, 出口裕弘(訳)(1976):文学空間 現代思潮社.
- Freud,S(1914):Remembering ,Repeating and Working Though. Standard Edition of The Complete Psychological Works of Sigmund Freud4-5. London, Hogarth Press. 道籙泰三(訳)(2010):フロイト全集 13 想起, 反復, 反芻処理 岩波書店 pp295-308.
- Giegrich,W(1991):The "Patriarchal neglect of the Feminine principle" :A psychological fallacy in Jungian theory. Harvest 45,7-30. 河合俊雄(編集・監訳)(2001a):女性原理の父権的な見過ごし 神話と意識[講義・講演集] 日本評論社
- Giegrich W(2000):ユング心理学の底なしさ 河合俊雄(編集・監訳) 魂と歴史性 pp178-210 所収 日本評論社
- Giegrich,W(2001b):テレビの機能と魂の苦境 河合俊雄(編集・監訳) 神話と意識[講義・講演集]pp106-130 所収 日本評論社
- Giegrich,W(2001c):マルティン・ルターの「試練」と神経症の発明 河合俊雄(編集・監訳) 神話と意識[講義・講演集]pp132-243 所収 日本評論社
- Giegrich W(2006) :Closure and Setting Free or the Bottled Spirit of Alchemy and Psychology Spring ,74,31-62.
- 弘中正美(1985):重篤な緘黙症における自我の病理性を巡って－母性の問題と自我境界の問題を中心として 心理臨床学研究 2(2),20-31
- 福本修(2008):行動化について - 「変形理論」(Bion) の観点から - 精神分析研究 52(4),374-384
- 藤山直樹(2010):集中講義・精神分析 下 フロイト以後 岩崎学術出版社
- 飯野和好(1999):ドン・ローロのつぼ 福音館書店
- 石谷みつる(2005):自律性の未熟さとしての場面緘黙 - 小一男児の事例を通して 東山紘久 伊藤良子(編)京大心理療法学シリーズ 遊戯療法と子どもの今 創元社 pp73-84
- Jung C G,& Pauli W(1955):The Interpretation of Nature and The Psyche. New York Bollingen Foundation. 河合隼雄・村上陽一郎(訳)(1976):自然現象と心の構造－非因果的連関の原理 海鳴社
- Jung C G(1921):Psychological Types. The Collected Works of C.G. Jung vol6, Princeton, Princeton University Press.
- 角野善弘(1998):分裂病の心理療法－治療者の内なる経験の軌跡 日本評論社
- 河合隼雄(1986):宗教と科学の接点 岩波書店
- 河合隼雄(1991):イメージの心理学 青土社
- 河合隼雄(2005):場面緘黙 Z 君の箱庭&プレイセラピーへのコメント 河合隼雄・山王教育研究所(編) 心理療法の実際 誠信書房 pp48-51
- 河合俊雄(1998):概念の心理療法 物語から弁証法へ 日本評論社
- 河合俊雄(2001):心理療法における心理と現実性 河合隼雄(編) 講座心理療法7 心理療法と因果的思考 岩波書店 pp169-208.
- 川田順造(1988):聲 ちくま学芸文庫
- 神田橋篠治(1984):精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社
- 木部則雄(2008):子どもの精神分析での両親の行動化 - エディプス・コンプレックスの渦中 - 精神分析研究 52(4),374-384
- 菊池孝則(2008):行動化－排出とコミュニケーション 精神分析研究第 52 巻第 4 号 ,366-373

高嶋：遊戯療法において「全体を捉える視点」を持つことの意義

- 前川美行(2010):心理療法における偶発事 破壊性と力 創元社
- McLuhan M(1964)Understanding media : the extensions of man, New York, McGraw-Hill. 栗原裕 河本仲聖(訳)(1987);メディア論人間の拡張の諸相 みすず書房
- Ong W J(1982):Orality and literacy : the technologizing of the word, New York : Methuen 桜井直文 林正寛 糟谷啓介(1991)(訳):声の文化と文字の文化 藤原書店
- 大場登(2005):場面緘黙Z君の箱庭&プレイセラピー 河合隼雄・山王教育研究所(編) 心理療法の実際 誠信書房 pp23-47
- 大井正己 藤田隆 田中通 小林泉(1982):青年期の選択緘黙についての臨床的および精神病理学的研究 精神神経学雑誌 84(2),114-133
- Plato(-):Phaidros 藤沢令夫(訳)(1967):パイドロス 岩波書店
- 西園昌久(1979):行動化について 精神分析研究 23(2),59-70
- Segal H(1978):On symbolism The International Journal of Psychoanalysis,59,315-319 伊藤良子(部分訳)(2001):心理治療と転移 - 発話者としての(私)の生成の場 誠信書房 p89
- 下山晴彦(2010):これからの臨床心理学 東京大学出版会
- 田熊友紀子(2008):水イメージからみた心理療法 日本評論社
- 高嶋雄介(2007):選択性緘黙の子どもとの遊戯療法において身体感覚や身体の在り方に着目する意味 心理臨床学研究 25(3),257-268
- 田中康裕(2008):心理療法における内側と外側 臨床心理事例研究 京都大学大学院教育心理教育相談室紀要 35号 ,17-19
- 山中康裕(1978):少年期の心 精神療法を通してみた影 中公新書

(臨床教育実践研究センター 助教 高嶋雄介)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

The Significance of Having “a Viewpoint of Perceiving the Whole” in Play Therapy: The Case of a Boy with Selective Mutism and an Old Tale

TAKASHIMA Yusuke

Play therapy is exposed to the question of how it relates the psychic process of play therapy to external reality, such as behavior and states of patient's daily lives. However, we intend to understand psychotherapy from the viewpoint that divides the inside and outside. Actually, this previous question was made with that a viewpoint in mind. There is also a viewpoint of perceiving the whole for the viewpoint that divides the inside and outside. The former viewpoint is based on the idea that we should put an external event into a “retort” of psychotherapy and concentrate on those things, even if we feel that the external event is seemingly meaningless and we alone believe it is important. If we can truly do that, a mere external event becomes the whole. And any literal boundary between the inside and the outside is gone. In this paper, I consider the case of a boy with selective mutism and an old tale through these two viewpoints and succeed in concretely showing their difference. In my conclusion, I refer to the possibility of a viewpoint that perceives the whole.